

# 若年無業者支援の現状

——地域若者サポートステーションの支援を通して——

東洋大学 小川祐喜子

## 1 目的

2000年以降、日本社会では若年失業者の増加、フリーターや若年無業者であるニートやひきこもりの若者が社会的な関心となった。そこで日本政府は、2003年に「若者自立・挑戦プラン」を策定し、チャンスに恵まれない若者を対象に若者支援を開始した。2006年から開始された「地域若者サポートステーション」（以下サポステと表記）事業は、厚生労働省と地方自治体が協働し、働くことに悩みを抱えている若者を対象とした包括的な支援である。それはNPO法人、財団法人など若者支援に実績のある団体によって運営されている。けれどもその事業内容は、サポステ事業を運営している母体の理念や自治体との連携度合いによって多様である。そこで本報告では、サポステの支援体制、他機関との連携状況、支援における課題、利用者の状況など郵送調査によって明らかとなった現状について報告する。

## 2 方法

本研究では、全国に設置されていたサポステ110カ所を対象に郵送調査を実施した。その結果、74票を回収することができた。本報告結果は、74カ所のサポステについて分析したものである。尚、サポステは現在（2013年6月）、全国149カ所に設置されている。

## 3 結果

サポステの多くが「特定非営利活動法人」（NPO法人）によって運営されており、その割合は全体の半数を超えている。支援目的では、8割の団体が第1の支援目的を就労支援と回答し、他方約7割の団体が利用者個人の主体形成であると回答している。サポステ事業の目的は就労支援であるが、すべてのサポステが支援の第1目的を就労支援としていないことがわかる。検討課題については、「発達障害の利用者の課題」が最も高く、次いで「精神障害の利用者の課題」と「高等学校との連携強化」が高い割合を占めていた。サポステは、ニートなどの若者に対して職業的自立を目指すことを目的とした支援機関である。けれども発達障害や精神障害の若者がサポステを利用している現状は、彼らの存在がこれまで見落とされてきた結果であると予測できる。他方、支援者における利用者の特性結果では、「対人関係が苦手である」、「コミュニケーション力が低い」、「ひきこもり経験がある」が高い割合を占めていた。このような特性を有するサポステ利用者の7割以上が、就職を希望している。しかし約7割の団体が、就職を希望する若者のうち実際に就職に繋がっている割合は5割未満であると回答している。以上の結果から、サポステに通う若者は、「働かない」のではなく、働きたくても働けない状態にあるといえる。

## 4 結論

全国に設置されているサポステの支援体制、他機関との連携状況などは一様ではない。しかし、利用者の特性、検討課題、就労状況については同様の課題を抱えている。それはサポステが、就労までに時間を有する発達障害や精神障害などの利用者を抱え込まなければならない状況にあるからといえる。

本研究はトヨタ財団2010年度研究助成プログラム（助成番号D10-R-0164）「日本社会における若年無業者支援の現状と今後のゆくえ——地域若者サポートステーションの支援事例を通して——」（研究代表者：小川祐喜子）の成果の一部である。